

2020/04/05

「良い行い」

■神が教える良い行いとは

「良い行いとは何か」を考えるにあたって最初に確認すべきことは、「何が良い行いかを決めるのは神であり、人ではない」ということです。私たちはともすると、自分の考えを基準にして、その考えに神の考えが合えば「アーメン」と応答しがちです。しかし、これは間違いです。神の考えが基準であり、私達が神の考えに合わせなければなりません。もし、自分の知恵で理解できないことがあったとしても、それを信じるしかないのです。神が言われることは正しいのですから、それを信じて行動することが正しいのです。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:8-10)

この御言葉からわかることは、「良い行い」とは「キリストを信じる信仰」を指しているということです。人が通常考えている「良い行い」ではありません。

神を信頼する信仰のことを、聖書は「愛」と呼びます。聖書が全編を通して「神を愛せよ」と教えているのは、「神を信頼せよ」ということです。

私たちは日頃様々なものを信頼しています。しかし、自分の力や名誉や富などを信頼しても、それは愛ではありません。聖書が「山を動かすほどの信仰があっても愛がなければ何の役にも立たない」と言っているのは、何かを信じることが大切なのではなく、神を信頼する信仰でなければ、何の役にも立たないということです。ここでは、それを「良い行い」と言っているわけです。

つまり、「良い行い」とは、何をするかではなく、その行いの目的やそれを統治するもの、すなわち「行いのかしら」が「信仰」でなければならないということです。いくら人に親切にしても、人から立派だと言われても、神を信頼するという「かしら」のない行いは、神の目にはまったくの無価値なのです。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:28-29)

あなたの行いは、神ではなく自分が「かしら」になっていないでしょうか。自分が良く思われたい、自分が気分良く進めたいという思いから発した行いは、それを仕切っているのはあくまでも自分であって、自分が栄光をとるための行いです。いくら正しいことをして

も、それは神の前では価値がないのです。

■悪い行い(罪)とは

「神を信頼すること」が「良い行い」ならば、「悪い行い」とは「神を信頼しないこと」です。つまり、「罪」とは「神を信頼しないこと」であり、「神を信頼すること」のみが、「罪ではない」ということになります。

「しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」(ローマ 14:23)

神を信頼するとは、疑いの気持ちがないということです。恋愛を例に考えてみましょう。愛し合っている男女の間に信頼があれば、まわりから何かをアドバイスする必要はなく、何が起ころうとも乗り越えられます。しかし、もし信頼関係を築いていなければ、どうしたら相手に愛されるだろうかと人からのアドバイスを求めます。つまり、心に疑いがあると、うまくいくだろうか、愛されるだろうか、どう思われるだろうか、と不安が生じます。

信仰はこの疑いを消すのです。あなたに神に対する信頼があれば、このことで神はどう思うだろうか、神は私に何をしてくれるだろうかという心配は起こりません。奉仕をするにしても、信仰があればそれで十分と考えます。

しかし、神に疑いがある人は、献金、奉仕、祈りなど、これだけ一生懸命やったのだから、神は私の祈りに答えてくれるだろうか、報いをくれるだろうかと考えます。「神は私をほめてくれるだろうか」と考えること、これが「疑い」です。

あなたは神とどのように付き合っているのでしょうか。あなたが行うことが信仰から発しているのであれば、それは「良い行い」です。何かを一生懸命頑張った後で神に報いを期待するのであれば、それは「良くない行い」です。「神は私をほめてくれるだろうか」と考えるのは、神を疑っていることであり、罪なのです。

■何を疑わずに信じるのか

1. こんな私でも神に赦され愛されていること

人間は、何かを一生懸命行うことで、「私を義としてください」「認めてください」という欲求を発するものです。しかし、神は私たちの行いによって私たちを愛したわけではなく、神の恵みが先なのです。私たちはまずそのことを信じなければなりません。それは、「こんな私でも赦し愛してくれている」と信じることです。

「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人がいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:7-8)

神の恵みが先であり、こんな私でも赦され、愛されていることを本当に信じることができれば、自然に感謝が生まれます。それが、神が教える「良い行い」です。

神を信じる信仰は、人の行いで作るものではありません。キリストが私たちのために死んでくださったという、キリストの十字架の恵みを受け取ることです。「神に愛されていることを信じること」、これが「良い行い」です。

2. 神は脱出の道を用意してくれていること

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」（I コリント 10:13）

今まさに世界中が患難に直面しています。直接病気でなくても、経済的な困難や、精神的な困難に直面している人が大勢います。しかし、問題にぶつかったら、神に祈ることができます。これが信仰です。つらい時、つらいと言って祈ること、助けてくださいと祈ること、これが信仰なのです。その時、脱出の道があることを信じ、その道に向かって疑わずに信じることができれば幸いです。

人は、患難にぶつかっている時こそ、神のことばを信じようとして祈ります。つまり、信仰が「かしら」に来るのです。これが「良い行い」です。そう考えると、まさに患難は恵みの時です。

逆に言うと、平和な時こそ危険なのです。信仰をかしらに置かず、自由を満喫し、互いに裁き合います。今、世界中がコロナウィルスという患難と戦っています。その結果、少し前まで他国を攻撃していた国も、互いに協力体制を敷くようになり、ローマ・カトリックとプロテスタントも共に祈りの時を持っています。

患難を、信仰をかしらに置く恵みの時としてとらえ、良い行いを見直す機会にしましょう。

この I コリント 10 章は、エジプトで奴隷にされていたイスラエルの民の話です。苦しみの中でイスラエルの民は、心を合わせて祈るようになりました。神に助けを求めて信じて祈ること、これに勝る良い行いはありません。

ところが、神がイスラエルをエジプトから脱出させ、平和を手にしたとたん、彼らは神に心を向けず、自分勝手な生き方を始めました。そこで神は、彼らのために、彼らの敵を残しておくことを決めたと聖書は教えています。それは、そのことを通して彼らの心が再び神に向くように訓練するためです。

この世の災いは、すべて悪魔がもたらした死によって生じたものです。イスラエルはその後も、敵に苦しめられますが、それは神が罰として与えたものではありません。神は、これらの災いをわざと放置して静観し、訓練するために用いられたのです。私たちは良い行いに

歩めるように造られているので、私たちが信じて祈れるように、神は導いておられるのです。今こそ、誰もが良い行いができるときです。「脱出の道を信じて祈る」、それが「良い行い」です。

3. 神の思いは人の思いよりも高いこと

「人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。」(エペソ 3:19)

「人知をはるかに越えた神にあなたの願うことをゆだねよ」とは、自分の思いよりも神の思いのほうが高いことを信じることです。

私たちは祈るときに、よく神に注文をつけてしまいます。しかし、それは、自分は神より偉いということを示す行為です。問題の解決を求めて祈るのは良いことですが、その方法は神にゆだねましょう。神の思いは人の思いよりも高いからです。これが神への信頼です。

よく「祈ってもきかれないのはなぜか」と質問されることがありますが、それは、神に注文をつけているのと同じことです。神は、あなたの願いが、あなたの信仰にプラスになると思えば、そうなさいます。マイナスになると思えばしません。さらに「こうしたほうがさらにプラスになる」と思ったら、別の答えを用意なさいます。

つまり、どんな結果になろうとゆだねればよいのです。その時はわからなくても、神はあなたの祈りを聞いてくださっています。願ったとおりにならなかったときは、聞かれなかったのではなく、神はもっと良いことを考えておられるということなのです。ですから、すべての祈りに対して感謝しましょう。

パウロも、自分の病について3度祈ったとありますが、結局病がいやされることはありませんでした。しかし、彼はその後手紙の中で「自分が弱い時にこそ神の恵みが働く」というさらに深い神とのかかわりを知ったことを告白しています。

パウロにとって、自分の弱さを常に知ることができるのは幸いなことでした。つまり、パウロの祈りに対して、「病を持っていたほうが信仰にプラスになる」と神は判断なさったのです。「自分が弱いからこそ神の力が働くから強い。だから私は自分の弱さを大いに誇る。」とパウロは言いました。

神を信頼するとは、まさにこういうことです。今問題を抱えている方は、神が考えておられる解決は、あなたが考えている解決よりもはるかに高いことを信頼し、信じて祈りましょう。そうすれば、すべてのことについて感謝することになります。これが、神が教えておられる良い行いです。

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

神が備えてくださった良い行い、それはイエス・キリストの十字架です。私たちが良い行いに歩めるように、神はあらかじめ愛を示してくださいました。神が教える良い行いとは愛であり、愛とは、神を信頼すること、信仰によって歩むことです。

あなたは良い行いに歩んでいるでしょうか。それとも信仰というかしらを抜きにして、自分にとっての良い行いを求めてはいないでしょうか。

何が本当に良い行いか、良い行いに目を向け、自分を見つめることができれば幸いです。